

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月30日現在

機関番号：72810

研究種目：基盤研究(A) (海外学術調査)

研究期間：2013～2017

課題番号：25257013

研究課題名(和文) 前3～2千年紀のアナトリアにおける都市国家の成立と変遷

研究課題名(英文) Rise and Transition of a City State in Anatolia in the 3rd and the 2nd Millennium B.C.

研究代表者

大村 正子 (OMURA, MASAKO)

公益財団法人中近東文化センター・アナトリア考古学研究所・研究員

研究者番号：80370196

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 35,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が基礎とするトルコ中央部のヤッスホユックの発掘調査は、前3千年紀後半の宮殿址の形態とそれを構成する部屋の機能を部分的にはあるが明らかにした。それは宮殿を中心とする都市がその城壁内だけではなく、交易を通して広く対外的にも機能していたことを推察させるものであった。また、遺丘の北西裾野で地中探査により検出された下の町は、前2千年紀初頭、交易を通して相互に関係をもつとともに、アッシリアやシリアとも強く関わったアナトリアの都市の一つがヤッスホユックに存在したことを示唆するものである。そしてこの宮殿をもつ都市は、交易がより活発になった前2千年紀の都市の先行者であった。

研究成果の概要(英文)：The excavation research and study at Yassihoyuk in the central Turkey has revealed shapes and patterns of a palace and functions or rolls of its consisting rooms in the 3rd millennium B.C. It is inferred the city having a palace as the heart in its center was active not only inside the city walls but also towards the outside areas. Also, both the architectural remains of the early 2nd millennium B.C. on the mound and the lower city in the north-western skirt of the mound which was found by the ground penetrating radar survey suggest that there was one of Anatolian cities which had trading relationships to each other as well as with Assyria and Syria. The city with this palace is a forerunner of the city of 2nd millennium B.C.

研究分野：考古学

キーワード：考古学 アナトリア 前期青銅器時代 都市国家 ヤッスホユック

1. 研究開始当初の背景

(1) ヤッスホユック (Fig. 1) (トルコ共和国クルシェヒル県) では、1986、1988、2000、2002 年の踏査、2007、2008 年の表採調査、地形測量、磁気探査を踏まえ、2009 年に遺跡中央部で発掘調査が開始され、2012 年の 4 次調査終了時点では、鉄器時代と前期青銅器時代の二つの文化層が確認されていた。



Fig. 1

このうち、下層の前期青銅器時代の大火災層から検出された日乾煉瓦の壁からなる大遺構は、2007 年の磁気探査で検出された遺構であることが確認された。2012 年までの調査では、磁気探査により推定された大遺構の中央の一部を掘り下げたにすぎないが、宮殿址であることを示唆する中央部プランが明らかになりつつあった。中央に大きな炉、そして北西壁の半ばに壁に接して設けられた階段付きの壇を備えた長方形の大広間もしくは中庭を中心に、その両側に細長い廊下状の空間、さらにその外側および後ろに多くの部屋が並び、その南東部には前室があると予測された。保存状態は比較的良く、幅 1.4m、高いところでは 3m 近くの高さで壁が残っていた。

(2) 上層の鉄器時代の文化層からは、主に後期鉄器時代の遺構が発掘されているが、出土遺物としては、中期もしくは前期鉄器時代の彩文土器(アリシャルIV式土器)等も出土していることから、発掘が進むことにより、中期前期鉄器時代の都市の存在が期待できることが期待できた。特に、表採と攪乱層からの出土ではあるが、前 8 世紀後半に年代づけられ、後期ヒッタイトのタバル王国と関連づけられるヒエログリフが刻まれた鉛製手紙

文書小片が発見されていることは、前 1 千年紀前半においても、ヤッスホユックが重要都市として位置していたことの証とも言えた。

中央アナトリアでは、後期ヒッタイトのタバル王国に関連する碑文が点在するが、東南アナトリアやシリアで知られている様な後期ヒッタイトの都市遺構は全く発見されていない。ヤッスホユックはその発見を期待させる遺跡であり、これが発見されれば、前 1200 年頃にヒッタイト帝国が崩壊した後、ヒッタイト民族とその文化がどのように移動、変化したかを確認することも可能になる。本研究からは外れるが、ヤッスホユックにおける重要なテーマの一つである。

(3) 下層では、上述したように、宮殿址と見られる大火災を受けた大遺構が出土し始めた。この遺構に関連して検出された土器は、従来、前期青銅器時代もしくは前 3 千年紀の後半に位置づけられているものが多く、また、建築材とみられる炭化物の C14 分析でも、前 2260-2000 年という測定値が出されている。

(4) 前 3 千年紀後半、アッカド王サルゴンのアナトリア遠征等、メソポタミアからアナトリアへの関心が高まり、前 2 千年紀初頭にはアッシリア商人が数多く到来し、カルム、ババルトゥムと呼ばれる居留地を作り、活発な商業活動を展開した。この前 3 千年紀末から 2 千年紀初頭のメソポタミアとの交渉の高まりを経て、アナトリアは文字を持つ歴史時代に入り、ヒッタイト王国形成の礎を築き始める。この過程の中で重要な役割を果たすのが、アナトリアの都市国家である。古代アナトリアにおける都市国家の成立は、前期青銅器時代とされている。しかしその考古学的実証は、特に中央アナトリアでは未だ為されておらず、その都市遺跡は未だ明確ではない。また、土器文化に関しても、前 3 千年紀末から 2 千年紀初頭の過渡期を経て中期青銅器時代と呼ばれる時代に、前期青銅器時代の伝統がいかに引き継がれていったのか、あるいは全く廃れてしまったのか、明らかにされていない。

2. 研究の目的

前 3 千年紀後半から 2 千年紀初頭のアナトリアでは、北方から印欧語族が漸次到来する

一方、東方のメソポタミア、シリアとの交流も盛んになり、特にアッシリア商人の活動に起因する遠隔地交易とアナトリアの域内交易が活発化する。前3千年紀後半のアナトリアには、この広範囲な交易の発展に対応できる都市国家が既に存在していたと考えられる。また、幾つもの都市国家の中から最も力を蓄え、勢力を拡大したものが、前2千年紀にはヒッタイト王国を成立させた。すなわち、古代東地中海世界においてエジプトと対峙しうる勢力となったヒッタイト帝国の基盤は、前期青銅器時代の都市国家の成立にあった。

本研究は、ヤッスホユックの発掘調査を通して、アナトリアの都市国家の初期形態を明らかにし、国家形態の変遷の中での歴史的な位置づけを行うとともに、アナトリアにおける古代都市国家の成立とその役割を考察しようとするものである。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、トルコ共和国クルシェヒル県チャイアウズ町ヤッスホユック遺跡における発掘調査を基本とする。ヤッスホユック遺跡における発掘調査は、少なくとも50年を要するものと考えられるが、その調査の第一段階として2009年に開始された遺跡中央部の宮殿址の発掘調査を継続した。

(2) 地中探査：磁気探査 (Geomagnetic survey) とレーダー探査 (Ground penetrating radar survey) を組み合わせて行った。磁気探査には Fluxgate Gradiometer: FM36 (Geoscan Research) を、レーダー探査には主に 400MHz のアンテナと、Geophysical Survey System, Inc.(GSSI) のシステムを使用した。

(3) 遺構と共に出土遺物を分析研究することにより、都市の構造を理解する。

4. 研究成果

(1) ヤッスホユック発掘調査：2009年に開始された発掘調査は、2015～2017年の本研究期間中に第Ⅰ層：鉄器時代、第Ⅱ層：中期青銅器時代、第Ⅲ層：前期青銅器時代の3文化層を確認することができた。第Ⅰ層は上から1～9建築層

を後期鉄器時代、10～13建築層を中期鉄器時代に年代づけることができた。第Ⅱ層は3建築層から成るが、いずれも大型建築の礎石とともに確認できたことは、紀元3千年紀から2千年紀にかけての都市の展開を追う本研究にとっては大きな成果である。キュルテペ/カニシユから知られている前2千年紀第Ⅰ四半期のアナトリア様式やアッシリア様式の印章が押印された封泥や土器片、鉛製のライオン-人間のハイブリッド像、青銅製印章がこの層と関連づけられた。

本研究の主眼である第Ⅲ層の宮殿址とみられる大建築遺構 (Fig. 2) は、遺丘中央部でおよそ1,600 m²に亘って発掘された。西側を除く周縁部の発掘は未だ完了していないが、おおよそのプランが確認された。この大遺構の下にはもう一つ別の火災層が存在することが確認されている。この大遺構と同様の遺構が存在するものと見られるが、この下層の遺構については、今後の発掘調査に委ねられる。



Fig. 2

宮殿址では中央大広間を中心に北西-南東軸に沿って対称に配置された17の部屋が発掘された (Fig. 3)。これらの部屋の全てについてその機能が明らかになったわけではないが、それぞれ異なる機能を有していたと考えられる。大広間には正面の壁 (西側) に沿って階段付きの壇がも設けられ、広間中央には矩形の付帯部と共に大型の円形炉があり、この大広間 (謁見の間) では、公的行事が執り行われたと見られる。この大広間に前室を除く他の部屋からは、直接アクセスするのではなく、細長い廊下を介して行

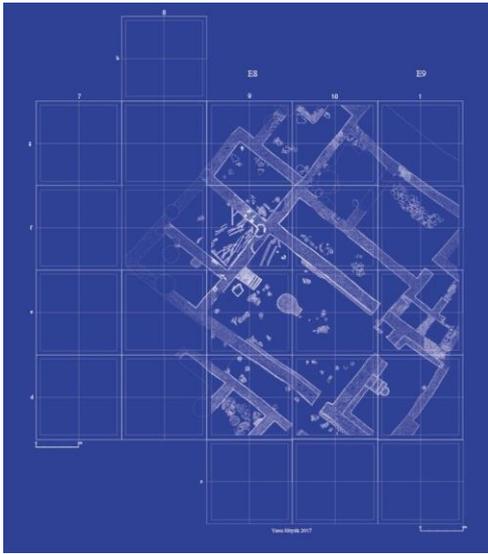


Fig. 3

われる。また、大広間の北側の廊下はその南東部の前室の北側では床面が高くなっており、廊下の段差のある北西部と南東部の間には3段のステップがある。この廊下は床面が高いまま小部屋にも続いている。さらに北側には、北壁に沿って2m余りの幅で床に敷石が施され、多数の紡錘車が検出されていることから糸紡ぎ室とも考えられる部屋と、壁沿いにぐるりと甕やツボが並べられた貯蔵室が連なっている。大広間の南側の廊下を挟んで、中央に小型の円形炉が設けられ、6-7基の貯蔵用大甕とともに石製挽臼が残された台所もしくは穀物の粉挽きに関連したと思われる部屋と、炭化した穀物が大量に検出された部屋が並んでいる。大広間から廊下状の長い部屋を経て続く後室との出入り口付近からは、錠前もしくは扉を封印したと推定される封泥片が多く出土している。出土遺物が比較的少ないこと、人骨の出土がないこと等から、この遺構は放棄された後に、焼かれたものと考えられる。

(2) 地中探査：2007年の予備調査で行った磁気探査により、遺丘中央部の第1の高まり部分における大遺構の存在が確認され、その後も磁気探査を継続したが、遺丘全般では大きな成果は得られなかったため、レーダー探査に切り替え、調査を行った。この結果、①遺丘中央部で大遺構の広がりを見直し、②中央からやや南の第2の高まり部

分で少なくとも3層の建築群が確認された。また③遺丘中央部第1の高まり部分を取り囲むように、この高まりと城壁への迫り上がりの間の落ち込んだ部分に、帯状の間隙が確認され、おそらく道が存在すると考えられる。④遺丘全体にわたって稜線に沿って確認される鉄器時代の城壁の内側に、より脆弱ではあるが、もう1本の城壁が一部確認された。レーダーによる地中探査でもっとも大きな成果といえるのは⑤遺丘の北西裾野で検出された「下の町」を構成すると考えられる遺構群の検出である。この遺構群のプランは、キュルテペ-カニシュの下の町のそれに酷似しており、前2千年紀第一四半期の外来商人の居留区であった可能性が高い。(Fig. 4)

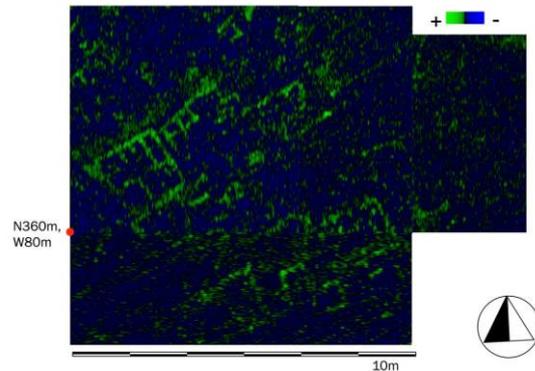


Fig. 4

(3) 前期青銅器時代末の建築と都市：ヤッスホユック第III層の大建築遺構は、中央に炉と階段付きの壇を有するコートヤードもしくは大広間を中心に、その両脇の廊下状の細長い部屋を挟んで少なくとも14の部屋がほぼ対称に配置されている。そのプラン、およびその規模から、公的建造物であり、神殿とするための設備遺物等が確認されないこと等から、おそらく地域の指導者もしくは首長の館である宮殿であったと考えられる。都市の成立の条件は、チャイルド以来、様々に論じられてきているが、考古学的に最も検証可能なのは、物理的な集落の構造である。つまり城壁、首長=王の館である中心的建造物、水利施設や街路等の存在が、計画的な意図を以って建造された集落を都市と呼ぶ。ヤッスホユックのこの大遺構は、中心的建造物の存

在を示している。アナトリアにおいて、特に中央アナトリアにおいて前期青銅器時代、前3千年紀後半における宮殿址等の公共建築物が、この規模で検出された例は今までにはなく、前2千年紀前半のキュルテペ/カニシュ、アジェムホユック/プルシュハッドウンに先行する都市の存在したことを証明するものである。地中探査で確認された脆弱な城壁及び宮殿址を取巻く道については、宮殿址と同時期である可能性が高く、今後の発掘調査で明らかににされるであろう。

また、この宮殿址から出土したラピスラズリを嵌め込んだ金製の耳飾りや金の縁飾り付カーネリアン製のビーズ等の装身具 (Fig. 5) はアシュルやウルの出土品との類似性が見られ、当時既にアナトリアとメソポタミアとの遠隔地交易とアナトリアの域内交易の二重構造をもつシステムの中にこの町も組み込まれていたことを物語る。天秤秤用の示すものと捉えられる。



Fig. 5

(4) 前期青銅器時代から中期青銅器時代への過渡期における土器： 宮殿址から出土したものとしては、大型の甕や中型の壺や水差し土器等、手捏ね土器が多くを占める。しかし、既にろくろ制作は始まっており、小型の赤色磨研土器の中には、前2千年紀の初頭の土器とされるものと同質のものも見られる。また、糸切り文が顕著な素焼きの小型杯も、前3千年紀から2千年紀にかけて継続して制作された土器である。一方、前3千年紀半ば頃から観られるインターミディエイト土器は、他の遺跡では前3千年紀

末にはアリシャルⅢ式土器に取って代わられるが、ヤッスホユックではインターミディエイト土器が、アリシャルⅢ式土器と平行して、しかし、アリシャルⅢ式土器よりも多くかつ長く使用されていた様に窺える。すなわち、宮殿址から出土している土器 (Fig. 6) から窺えることは、前3千年紀半ば、もしくは前半からの土器制作の伝統は、前3千年紀末まで概ね継続し、その間に吸収したろくろ技法と共に、前2千年紀の特徴である洗練された赤色磨研土器を既に獲得していたとみられる。



Fig. 6

ヤッスホユックの発掘を通して、宮殿址、城壁を備えた都市が、その出土遺物から推察するに、城壁内だけではなく、アナトリアとメソポタミアとの遠隔地交易とアナトリアの域内交易の二重構造をもつシステムの中で対外的にも機能していたことを推察することができる。また、直後の前2千年紀初頭の遺構と、遺丘の北西裾野で地中探査により検出された下の町の存在は、交易を通してアナトリアの各都市が相互に関係をもつとともに、アッシリアやシリアとも強く関わった時代の一都市の存在を示唆するものであり、それにわずかに先駆ける宮殿址は、前2千年紀初頭の交易活動に臨みうる都市が既に存在していたことを証明するものとなった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 19 件)

① Mark WEEDEN, "YH150318: a Pot-sherd Inscribed with Hieroglyphs," *Anatolian Archaeological Studies* Vol. XX, Tokyo 2017, pp. 77-82. 査読 有

② Katsutoshi FUKUDA and Kazuhiro KUMAGAI, "Ground Penetrating Radar Survey at Yassihöyük: Searching for Vestiges of the Ancient Lower City," *Anatolian Archaeological Studies* Vol. XIX, Tokyo 2016, pp. 73-79. 査読 有

③ Masako OMURA, "Yassihöyük Kazıları" *KIRŞEHİR Arkeoloji ve Paleoantropoloji Çalışmaları*, Kırşehir 2016, pp. 29-51.

④ Masako OMURA, Yassihöyük Excavations : First Five Seasons 2009-2013," *Anatolian Archaeological Studies* Vol. XIX, Tokyo 2016, pp. 11-71. 査読 有

⑤ Mark WEEDEN, A Probable Join to the "Kırşehir Letter", *Anatolian Archaeological Studies* Vol. XVIII, Tokyo 2013, pp.16-17. 査読 有

[学会発表](計 25 件)

① Masako OMURA, Yassihöyük Excavations 2017, 40th International Symposium of Excavations Surveys and Archaeometry, 2018. 5.

9. Çanakkale, Turkey

② 福田勝利・鉾井修一 ヤッスホユック遺丘における遺構分布・状態調査 2017 年度トルコ調査報告会 2018 年 3 月 25 日 東京

③ 大村正子 第 9 次ヤッスホユック発掘調査 2017 年度トルコ調査報告会 2018 年 3 月 25 日 東京

④ 中村栄三、松井孝典他 前期青銅器時代の層位から出土した鉄関連試料の地球化学的記載 第 27 回トルコ調査研究会 2017 年 3 月 5 日 東京

⑤ Levent ATICI, Pastoral Economy in Central Anatolia during the Early-Middle- Late Bronze Age Transitions, 第 27 回トルコ調査研究会 2017 年 3 月 5 日 東京

[図書](計 1 件)

① KUÇUKARSLAN, Nurcan, Middle Iron Age Pottery from Yassihöyük (Kırşehir): A Central Anatolian Assemblage, Dissertation, İhsan Doğramacı Bilkent University, Ankara 2017. 217 pages, 147 figures

[その他]

新聞報道

① 「紀元前 7 世紀のグリフィン像-トルコで日本の調査隊が発掘」読売新聞(日刊) 2017 年 2 月 1 日

② 「宮殿跡 紀元前 23~22 世紀か-アナトリア」読売新聞(日刊) 2014 年 2 月 12 日

③ 「精巧な鉛ライオン像 紀元前 20~18 世紀-トルコの遺跡 高い鑄造技術」読売新聞(日刊) 2013 年 12 月 14 日

ホームページ等

<http://jiaa-kaman.org>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大村 正子 (OMURA, Masako)
中近東文化センター・アナトリア考古学研究所・研究員
研究者番号 : 80370196

(2) 研究分担者

大村 幸弘 (OMURA, Sachihiro)
中近東文化センター・アナトリア考古学研究所・所長
研究者番号 : 10260142

松村 公仁 (MATSUMURA, Kimiyoshi)
中近東文化センター・アナトリア考古学研究所・研究員
研究者番号 : 60370194

(4) 研究協力者

大森 貴之 (Oomori, Takayuki)
東京大学・総合研究博物館・特別研究員
研究者番号 : 30748900

福田 勝利 (FUKUDA, Katsutoshi)
京都大学・産官学連携本部・准教授
研究者番号 : 80504331

熊谷 和博 (KUMAGAI, Kazuhiro)
国立研究開発法人産業技術総合研究所・物質計測標準研究部門・研究員
研究者番号 : 20582042

FAIRBAIRN, Andrew Stephen
クイーンズ大学 (オーストラリア) 教授

ATICI, Ahmet Levent
ネヴァダ大学 (USA) 准教授

WEEDEN, Mark
ロンドン大学 (イギリス) PhD